

## 「すくすく親子教室」に関する尺度の検討 ～1歳6か月児健診フォロー事業の効果をみる試み～

牛ノ濱 幸代<sup>1)</sup> 平田 直美<sup>2)</sup> 古川 淳子<sup>3)</sup>  
中間 皓子<sup>3)</sup> 田中 みゆき<sup>3)</sup> 山下 桂子<sup>3)</sup>

### 要 旨

**目 的:** 1歳6か月児健診フォロー事業である「すくすく親子教室」に関する効果を測定する尺度(「親子教室尺度」)を検討することである。

**方 法:** 対象は「すくすく親子教室」に参加した69名。12項目に5件法の表面妥当性を確認した「親子教室尺度」を作成し、質問紙調査を郵送法で実施した。そして、信頼性・妥当性の検討をした。

**結 果:** 尺度は $\alpha = 0.91$ と高い信頼性を得た。因子分析した結果、「発達に関する情報の充足」と「困りごとを相談できる心理的満足」の2因子で構成されていた。そして、療育利用があると、「親子教室尺度」の得点が高かった。

**結 語:** 表面妥当性、併存妥当性、内的一貫性があった。今後、対象を拡げ、精度を高める努力を重ねていきたい。

**キーワード:** 乳幼児健診, 親子教室, 発達障害, 療育, 尺度

### I はじめに

発達障害を持つ乳幼児の保護者は、障害に関わらず育児が難しいとされる現代において、育児ストレスは大きく、早期から専門家によるサポートが必要とされてきている(渡部ら, 2002)。発達障害をもつ子どもと保護者への早期発見・早期支援だけでなく、幼児期からの継続的な支援は、非常に重要である。それは、子どもの生活のしにくさをはじめとする社会性に関する能力の障害に対応することになるからである。さらに、成人以降の社会参加に影響を及ぼすことが明らかになっている(小山, 2009)。実際、発達障害者支援法改正で、乳幼児期から高齢期までの切れ目のない支援がうたわれており、課題となっている。また、発達障害の子どもへの保護者への対応は、育児のしにくさから心理的負担が大きく、虐待のリスクをへらすことにつながっていく。

1歳6か月児健康診査(母子保健法第12条)は、早期の発達障害の気づきからその児に合った支援へ繋ぐ上で大きな役割を担っている。乳幼児健診で早期発見できても、早期支援につなげることは課題である。子ども社会性に関する微妙な違和感に揺れ動く心理状態の保護者に対する保健師・助産師等、地域の看護職の細やかな支援(中山, 2008)が必要となる。しかし、発達障害児の保護者への支援方法と

して確立された支援方法の報告(西嶋, 2015)は未だ少なく地域差もあり、手探りで支援を進めている現状がある(稲葉, 2011)。

看護職には、乳幼児健診を機会に早期発見するだけでなく、発達障害等のグレーゾーンにある親子に対し、育児のしにくさに寄り添い支援し、できるだけ早期に親自身が主体的に療育機関や医療につながっていくことを支援することが期待されている。健診後のフォロー事業として親子教室の取り組みが重要視されている(河野・伊藤, 2011)。また、親子教室は、子どもの健やかな発達を促すことはもちろん、子育てに関する保護者の不安の軽減を図り、育児に関する感受性を育む(大鐘, 2013)、保護者支援の場(長尾, 2011)としても機能が期待されている。

本研究の目的は、A市における1歳6か月児健診フォロー事業である親子教室の評価と発展のために、その効果を測定する尺度(以降「親子教室尺度」)の作成を検討することである。

### II 方 法

#### 1. 対 象

A市B保健センターにおいて、1歳6か月健康診査以降、心理発達相談において要経過観察となり、平成25年4月～平成27年9月まで、「すくすく親子教室」(以下、親子教室)に参加した親子224名(224組)。

#### 2. 期 間

平成26年11月～27年1月

1) 鹿児島純心女子大学看護栄養学部看護学科

2) 元鹿児島純心女子大学看護栄養学部看護学科

3) 鹿児島市役所

### 3. 調査内容

#### 1) 親子教室の効果に関する項目の抽出

保護者に親子教室に参加した効果に関する感想、意見をインタビューし、記述した結果をもとに、親子教室に従事するスタッフ13名で親子教室の効果について話し合い、効果測定に妥当性が高いと考えられた項目を抽出し、12項目を得た。

2) 抽出した12項目の質問に対し、5件法（1：そう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらともいえない、4：まあそう思う、5：そう思う）の選択を設定し、「親子教室尺度」を作成した。尚、信頼性を高める目的で、逆行項目を2項目設定した。

3) 質問紙を郵送法にて送付し、返送にて回答を回収した。

4) 対象の属性、親子教室の効果測定した。

5) 「親子教室尺度」を探索的に因子分析し、構造を検討した。

#### 4. 倫理的配慮

1) 事業を実施する保健センター所属長、及びA市の保健師会議において研究の説明を行い、同意を得た。

2) 研究者が対象者に、倫理的配慮については参加の自由意思、個人情報保護、不利益最小化等に関し十分に説明した文書を作成し、調査用紙と共に郵送した。

3) 返信をもって同意を得たものとした。

4) データは匿名にて収集し、個人が特定されないようにした。

#### 5. 統計学的な解析方法

1) データの集計及び分析はSPSSver.22を用いた。

2) 対象の属性、療育利用等について記述した。

3) 「親子教室尺度」の記述、信頼性係数を測定した。

4) 「親子教室尺度」について、相関行列を求め、因子分析を行った。最尤法で、2因子を抽出し、斜交のバリマックス回転を実施した。

## Ⅲ 結 果

### 1. 対 象

回収した71名、そのうち「親子教室尺度」に著しい欠損値の方を除いた69名。回収率30.8%。

児の性別＝男44名(63.8%)、女25名(36.2%)。児の年齢は、平均年齢と標準偏差は、 $32.4 \pm 8.4$ 月(2歳8か月 $\pm$ 8か月)だった。親子教室への参加回数は、 $3.7 \pm 11.7$ 回。

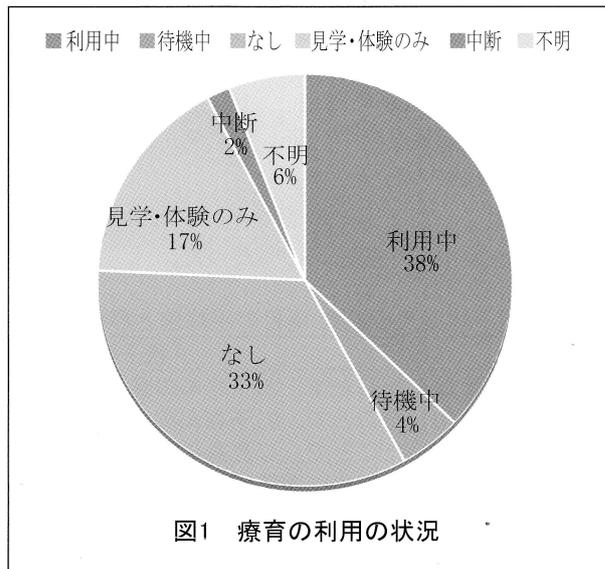
回答した保護者は、母68名(98.6%)、父1名(1.4%)であった。

### 2. 療育利用(図1)

対象児が親子教室を通して早期に然るべき専門機

関に繋がり、継続的な支援を受けることがスタッフの期待する一つの方向性である。

療育利用が有った方は29名(42.0%)。そのうち、利用中が26名、待機中3名であった。療育利用なかった方は36名(52.0%)、全く療育を利用したことがない23名、見学・体験のみ12名、中断した1名と回答した。不明が4名(5.8%)であった。



### 3. 「親子教室尺度」の検討

#### 1) 「親子教室尺度」12項目の記述統計(表1)

平均値と標準偏差は表2に示した。逆転項目で質問した2項目は、他の10項目と同じ方向に得点できるように、修正している。つまり、得点が高いほど、親子教室の効果があったことを意味している。平均値が1.5未満、4.5以上の極端に偏った分布を示す項目はなかった。

平均点が5点満点中4点台と高かった項目は、「教室の連絡帳の記入に抵抗があった(逆転項目)」、「すくすく親子教室は、お子さんの発育・発達で悩んでいる保護者にとって必要な場である」であった。抵抗のなさ、必要な場との認識があったと推測される。

一方、平均点が低かったのは、「遊び方や関わり方が分かったことでお子さんに良い変化があった」「スタッフに相談して、お子さんとの遊び方や関わり方が分かったことでお子さんによい変化があった」であった。いずれも遊びや関わり方を具体的にしり、かつそれを通して子供に変化をもたらすことはなかったと伺える。遊びや関わり方へのわからなさがあり、その必要性をスタッフに表現できていない可能性がある。さらに、仮に遊び方や関わり方が理解できていたとしても、その実践や子どもに変化をもたらすに至っていない可能性も考えられる。

2) 「親子教室尺度」としての記述統計

12 項目の総合得点は、平均点±標準偏差は、44.9 ± 9.0 点、最低 25 点、最高 60 点で、分布（図 2）は、1 峰性の正規分布であった。机上での尺度の最低点は 12 点、最高で 60 点になる。今回測定した分布をみるとやや上方に分布し、つまり親子教室の効果があったとする方に得点が分布していることになる。

12 項目の信頼係数は  $\alpha = .91$  と高い内的一貫性を示した。

3) 「親子教室尺度」の構造

親子教室効果を因子分析した結果、以下の 2 因子で構成されていた（表 2）。

第 1 因子、第 2 因子の寄与率は、32.0%、24.3% となり、累積寄与率は 56.3% だった。

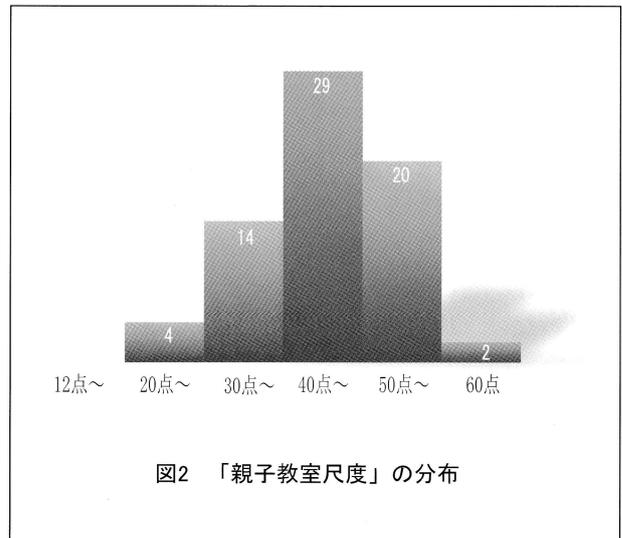


表 1 「親子教室尺度」12 項目の平均値と標準偏差

「親子教室尺度」12 項目	平均値	標準偏差
1 教室に参加したことで、お子さんの発育・発達へ関心が高まった。	3.87	0.96
2 教室に参加したことで、お子さんの発育・発達を理解するきっかけになった。	3.81	1.00
3 教室に参加したことで、ご自身の子育ての変化や気づきにつながった。	3.67	0.96
4 教室の連絡帳の記入に抵抗があった。*	4.25	0.89
5 連絡帳がスタッフとのやりとりに役立った。	3.67	1.14
6 教室に参加したことで、スタッフに相談できた。	3.91	1.07
7 毎回、子どもの様子をきかれることが苦痛だった。*	3.79	1.14
8 スタッフに相談して、お子さんとの遊び方や関わり方がわかった。	3.39	1.15
9 遊び方や関わり方がわかったことでお子さんに良い変化があった。	3.35	1.01
10 教室に参加したことで、子育てに関する（サービス相談機関等）情報を得ることができた。	3.8	1.08
11 すくすく親子教室に参加して満足だった。	3.43	1.19
12 すくすく親子教室は、お子さんの発育・発達で悩んでいる保護者にとっては必要な場所である。	4.01	0.92

\*: 逆転項目

表 2 「親子教室尺度」の構造

項目内容	因子負荷量		共通性
	第1因子	第2因子	
<b>教室参加をきっかけにした子どもの発達や育児への関心の増加</b>			
1 教室に参加したことで、お子さんの発育・発達へ関心が高まった。	0.933		0.883
3 教室に参加したことで、ご自身の子育ての変化や気づきにつながった。	0.828		0.732
2 教室に参加したことで、お子さんの発育・発達を理解するきっかけになった。	0.746		0.662
9 遊び方や関わり方がわかったことでお子さんに良い変化があった。	0.595	0.450	0.556
10 教室に参加したことで、子育てに関する（サービス相談機関等）情報を得ることができた。	0.584	0.444	0.538
<b>困りごとを相談できる心理的満足</b>			
11 すくすく親子教室に参加して満足だった。	0.479	0.718	0.745
8 スタッフに相談して、お子さんとの遊び方や関わり方がわかった。	0.435	0.654	0.623
6 教室に参加したことで、スタッフに相談できた。		0.612	0.532
12 すくすく親子教室は、お子さんの発育・発達で悩んでいる保護者にとっては必要な場所である。	0.488	0.577	0.571
5 連絡帳がスタッフとのやりとりに役立った。	0.455	0.503	0.460
4 教室の連絡帳の記入に抵抗があった。*		0.480	0.231
7 毎回、子どもの様子をきかれることが苦痛だった。*		0.461	0.23
<b>固有値</b>	<b>3.845</b>	<b>2.916</b>	
<b>寄与率 (%)</b>	<b>32.044</b>	<b>24.299</b>	
<b>累積寄与率 (%)</b>	<b>32.044</b>	<b>56.346</b>	

\*: 逆転項目

各因子を構成する因子負荷量 0.4 以上を示した項目、そして因子名は以下の通りであった。

因子 1 は、因子負荷量の多い順に「お子さんの発育・発達への関心が高まった」「自身の子育ての変化や気づきにつながった」「お子さんの発育・発達を理解するきっかけに」「遊び方や関わり方が分かったことでお子さまにより変化が」「子育てに関する情報を得ること」から構成されていた。また、第 2 因子の因子負荷量が高いが第 1 因子でも因子負荷量が .4 以上を示したのは「子どもさんの発育・発達で悩んでいる保護者に必要な場」「親子教室に参加して満足」「連絡帳が吸った府とのやり取りに役立つ」「相談して、お子さんとの遊び方や関わり方がわかった」があった。因子名を「教室参加をきっかけにした子どもの発達や育児への関心の増加」と命名した。

因子 2 は、因子負荷量の多い順に、「教室に参加して満足」「相談してお子さんとの遊び方や関わり方がわかった」「スタッフに相談できた」「親子教室はお子さんの発育・発達で悩んでいる保護者にとって必要な場」「連絡帳がスタッフとのやり取りに役立つ」「連絡帳の記載に抵抗なかった」「子どもの様子を聞かれることは苦痛でない」だった。さらに、第 1 因子の因子負荷量が高いが第 2 因子でも因子負荷量が .4 以上を示したのは、「遊び方や関わり方が分かったことで子どもにより変化が」「参加したことで子育てに関するよい情報を得た」であった。因子名は「スタッフとの関わりから得る満足」とした。

下位尺度とみなすと、第 1 因子の 5 項目は  $\alpha = .89$ 、第 2 因子の 7 項目は  $\alpha = .85$  と、いずれも内的一貫性が高かった。

#### 4) 親子教室効果と療育利用の関連

親子教室参加の帰結として考えられる療育利用

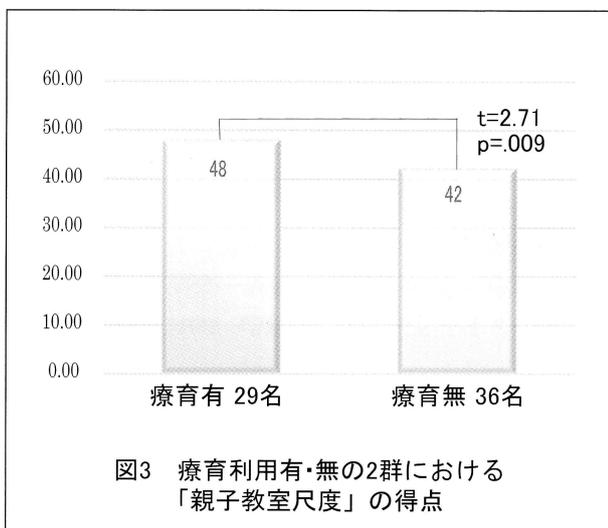


図3 療育利用有・無の2群における「親子教室尺度」の得点

の有・無の 2 群で、「親子教室尺度」得点に差がないか、t 検定を実施した。療育利用・有群で  $48.1 \pm 8.1$  点、療育無群で  $42.3 \pm 8.8$  点、 $t=2.716$  ( $p=.009\%$ ) で有意差を認めた(図 3)。言い換えると、療育利用・有群が、療育利用・無群と比べ、親子教室の効果を感じていた。親子教室に効果を認めたことと療育を利用したことと関連を認め、併存妥当性があると解釈することが可能となった。

## IV 考 察

研究の目的は、1 歳 6 か月児健診フォロー事業の親子教室の評価のために尺度を作成し検討することであった。親子教室に参加した保護者をインタビューし、親子教室の効果を明らかにし、その効果を測定するために作成した「親子教室尺度」について、考察する。

### 1. 各項目から見た親子教室の効果

事業評価の内容を項目毎に検討する。

まず得点の高かった 3 項目から、保護者は児の様子や気になること等を抵抗なく連絡帳に記入し、直接スタッフに対して相談できたと実感を得ていた。また、健診の事後フォローの場である親子教室の必要性についても高く認識されていた。

しかし得点の低かった 3 項目から、限られた参加回数の中で児の変化は見えにくく、児への具体的な遊び方や関わり方が分からないことで、親子教室に対する満足度が低くなっていることが推測された。

大鐘 (2013) は、支援者の「遊びを通した支援」が保護者の子どもに対する「非応答的育児」と、そして支援者の「共感・応答・援助調整」が保護者の「育児効力感」に関連があったと報告していた。

今回、遊びや育児のわかり方に関する項目の得点が高くなかった。そこから、子どもの「非応答的支援」に関する内容を意図的に親子教室に盛り込み、かつ効果をみる尺度の項目に追加の可能性が伺える。

また、保護者は児の発達の気がかり以上に食事やトイレ、かんしゃく等の生活面に関することに育児ストレス (長尾, 2011) を感じており、親子教室の中でそれに対する具体的な助言を求めていると考えられた。

渡邊は、わが子に障害があるかもしれないという納得への準備作業に取り掛かる際、その時々不安や悩みについて具体的な情報提供の関わりが重要と指摘している。その納得への準備作業は、母親が主体的適応力を発揮し、子どもと共に生活を形成していく過程に欠かせない条件整備となつた (2014)。

今後は児の発達の側面の気づきを促すことと同時に、生活面における具体的な困り感を意図的に聞き

出し、保護者のニーズに沿った助言をすることで、保護者の主体的適応力発揮への支援とつなげる親子教室の実現、及びその効果測定が可能になると考える。

## 2. 尺度としての意義

「親子教室尺度」は $\alpha = .91$ であり、高い内的一貫性としての信頼性を備えていた。

また、下位尺度はそれぞれ第1因子「教室参加をきっかけにした子どもの発達への関心の増加」5項目は $\alpha = .87$ と信頼性が高かった。また、第2因子「スタッフとの関わりから得る満足」7項目からなる尺度は、 $\alpha = .85$ であり、やはり信頼性は高かった。しかし、12項目すべてからなる尺度は $\alpha = .82$ と12項目を一つの尺度とみなした場合の方が信頼性はより高くなった。2つの因子の影響を考慮して分析し、斜交回転を施したのでた結果であった。1つの項目で2つの因子とも因子負荷量は.40以上のものが6項目あったことも影響していた。つまり、子どもへの発達に関わる必要性について理解を深めることと、教室に参加してスタッフとの関わりに満足することは互いに影響していることは体験上、現実的であり、納得できる。

表面妥当性は、尺度作成時に事業に従事するスタッフ13名から支持されている。

対象児が親子教室を通して早期に然るべき専門機関に繋がり、継続的な支援を受けることがスタッフの期待する一つの方向性である。そこで、利用中、待機中と回答した群を「利用有り」、全く療育を利用したことがない、見学・体験のみ、中断したと回答した群を「利用無し」としてその関連を検討した。すると、「親子教室尺度」の得点が高い場合、療育の利用ある割合が高かった。つまり、親子教室参加をとおして、療育の利用につながった可能性が高かったといえる。そこから、併存妥当性の高さを伺うことが可能である。ただ、外的基準が、療育利用の有無のみであり、関連性の程度まで検討できていなかった。また、児の年齢等利用に係る影響要因について等吟味して判断する必要が残っている。

## V おわりに

「親子教室尺度」の表面妥当性、内的一貫性を確認し、そして外的妥当性を推測できた。しかし、対象数が69名と少なく、また一つの市の一つの保健センターに限定されており、一般化には限界がある。今後、対象を拡げ、精度を高める努力を重ねていきたい。

今回、1歳6か月児健診事後フォロー事業として、親子教室は児の発育・発達に悩んでいる保護者にとってその必要性は高く、療育利用をしている保護者の評価は高い傾向を認めた。また、児との遊び方や関わり方が分からないことで親子教室の満足度が高くなりきれなかった推測できた。そこで、保護者のニーズを引き出すために、生活面における具体的な困り感を意図的に聞き出し、そして支援をすすめる支援の方向性が示唆された。保護者支援の視点を持ちながら、今後も親子教室の充実に努めることを念頭に、尺度開発を努力したい。

## 文 献

- 1) 渡部奈緒, 岩永竜一郎, 鷲田孝保: 発達障害幼児の母親の育児ストレス及び疲労感 運動発達障害児と対人・知的障害児の比較. 小児保健研究 2002; 61,1 : 553-560
- 2) 小山智典・稲田尚子・神尾陽子ライフステージを通じた支援の重要性. 精神治療学 2008;24,10:25-27
- 3) 河野智佳子, 伊藤良子: 早期の親子集団療法の効果に関する研究. 乳幼児医学・心理学研究 21,2, 2012,117-126
- 4) 西嶋真理子, 松浦仁美, 星田ゆかり: 発達障害児の親を対象に保健師が行った前向き子育てプログラム. 地域看護学会誌 2015;18,2,3:41-50
- 5) 中山かおり・斎藤泰子・牛込三和子: 就学前の発達障害児とその家族に対する保健師の支援技術の構造の明確化. 日本地域看護学会 2008;11,1:59-67
- 6) 稲葉房子・木村留美子・津田朗子他: 健診における発達障害児の早期発見や介入に関する調査. 金沢大学つるま保健学会誌 2011;35:251-61
- 7) 大鐘啓伸: 乳幼児健康診査事後指導教室における援助関係 母子が共にあることの感受性を育む, 人間性心理学研究 2013;31,1: 43-53
- 8) 長尾秀夫, 三好幸子, 吉野あゆみ他: 1歳6か月児健診の事後指導教室「なかよし教室」27年目の現状と成果 保護者の子どもへの関わりと満足度から. 保健師ジャーナル 2011;67,9:810-817
- 9) 上掲7)
- 10) 上掲8)
- 11) 渡邊充佳: わが子が「自閉症」と診断されるまでの母親の経験の構造と過程 自閉症児の母親の葛藤のストーリー. 社会福祉学 2014 ; 55,3 : 29-40